

---

Fate/The Martial artist - **異質なる転生者** -

ジュン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate/The Martial artist - 異質なる転生者 -

### 【Nコード】

N0323P

### 【作者名】

ジユン

### 【あらすじ】

武神として君臨していた俺は神の気儘な考えにより、恥ずかしい死に方をして転生する事になった。

転生先は型月世界。

それも、何故だかゲームのFate/extraの世界のサーバントとしてだった。

……はあ。

勝ち抜けるのか俺？

死にたくは無いぞオイ！

## キャラ紹介（前書き）

多分二期二期って入れたら、F a t e / s t a y n i g h t やらに  
入ると思います。

## キャラ紹介

キャラ紹介です

名前 不倒咲夜ふたうさくせ

身長 190?

体重 80?

見た目 紅髪で長髪のロングをオールバックにしている。が、何故だか左側だけ前髪がオールバックにならず、落ちてくる。目付きは、基本的につり目気味。

また、体には無数の傷（名誉の負傷）があり、歴戦の兵つわものといった感じとなっている

北陸出身で、不倒グループの副社長。類い希なる黄金律スキルを生かし、不倒グループを僅か二年で世界トップの大企業にした。

また、物心つく前から阿呆だが『日本の最終兵器』の異名を持つ父親、不倒終に自らの流派『初終流』を叩き込まれ、八歳で免許皆伝その後、自ら『不倒流』を編みだし、実質上世界最強の武神として君臨した。

更に様々なスポーツ、ボクシングや柔道等様々な闘技にも進出し、どれも世界チャンピオンとして君臨している。

F a t e ステータス

名前 不倒咲夜

クラス ベヘアシャー (君臨者)

属性 中立・中庸

筋力 A++ (50) 150)

魔力 B (40)

耐久 A+ (50) 100)

幸運 E X

敏捷 A++ (50) 150)

宝具 ?

保有スキル

黄金律 E X

人生において金銭がどれほどついて回るかの宿命

直感 A

戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を”感じ取る”能力。研ぎ澄まされた第六感はやも未来予知に近い。戦闘続行 A  
往生際が悪い。瀕死の傷でも戦闘を可能とし、決定的な致命傷を受けない限り生き延びる。

単独行動 E X  
生きている為、マスターがいなくても寿命、または死を迎えぬ限り  
現界可能

鷹の目 B (40)

弓術に於いて、間合い約2?以内の的なら寸分変わらず射抜く事が出来る。このレベルだとまだ、呪いレベルとはならず、超人の域である。

フラグ建築士 B (40)

幻想殺し並とは言わずとも、ギャルゲの主人公並のフラグメイカー  
さを持つ。

なんちゃってスキル E X

武道に関する何らかの技術を何となく気合いで行使する事が出来る。  
その度合いは最早奇跡のレベル。

名前 不倒終

身長 210?

体重 100?

年齢 42

見た目 紅髪のベリーショートをツンツンに立てている。眼光が鋭  
くつり目。

年齢に見合わず、二十歳並みにしか見えない。

初終流の開祖で、アメリカ軍のトップに『彼が第二次世界大戦に参加していたなら、アメリカは核を使っても完敗していた』と言わしめた化物。

素手で虎を一撃で倒す事が出来る。

また、銃で撃たれても胸板を通らず、弾丸の方が潰れる。

妻の不倒舞とは永遠にバカップル。

名前 不倒舞

身長 162?

年齢 42

見た目 紫色の髪で、腰まであるストレート。目は少しだけつり目。スタイルはかなり良い。

年齢に見合わず、見た感じは18歳くらい。

元々千城グループの社長だったが、終と婚約し不倒グループと名を変えた。

子供である不倒咲夜のお陰で、不倒グループは世界トップの大企業と成り上がり、感謝している。

『初終流』

その名の通り『初撃で終らせる』為の流派。

一撃で終らせる事に重点を置き、二撃目からは疎かになるが、一撃目の威力はソレを補って余りある程の絶大な破壊力・速度がある。

対人・対多人数・対軍が想定されており、それぞれを一撃で地に伏

せられる威力がある。

弱点としては、一撃目以外で同威力の一撃を放つ場合、溜めがいること。

だが、この弱点は開祖である不倒終には存在せず、同威力の一撃を連発する事が出来る。

『不倒流』

『必ず負けない』『必ず勝つ』の二面性を持った流派で、防御術、攻撃術両面に優れているが、弱点としては初撃が弱いことが上げられる。

『初終流』とあわせて使うことで真価が発揮され、無双と言わざるをえない程の力を発揮する。

多彩な武器・弓術をも織り交ぜ、更にサバットやクラヴ・マガ等様々な流派を組み合わせている。

また、対武器・対人・対軍・対獣等も視野に入れており、如何なる場合も想定外の範囲を逸脱することはない。

必殺技として、『天蓋』という反則気味な一撃がある。

これが、開始前のステータスです。

だいぶバグですが、多分ステータスはまだ更新していきます。

Prologue - 紅蓮の兵、食中毒に死す -

ジリリリリ……………

俺はけたたましい目覚ましの鐘によって起こされた。  
目覚ましの指す時刻は朝5時。

端から見れば、まだそこまでといった時間だろう。

「もうこんな時間か……………」

重い体を無理に動かし、準備を整え庭に向かう。

「……………ふう」

軽くストレッチをした後に、仮想の相手……………俺の場合は親父の不  
倒  
終だ。

「……………」

段々と仮想の敵の姿が浮かび出す。

……出てきた親父は、ポケットに両手を突っ込み、それでいて殺気をバンバン飛ばしてきていた。

「…………行くぞ！」

俺は死角に即座に移動し、親父に飛び掛かる。

が、いつの間にか体をこちらに向け、得意技の『貫槍』が俺に向かう。

『貫槍』とは、居合い切りを拳で行う技である。

その威力はライオンをも一撃で殺す程の破壊力を持ち、尚且つ速度は音速に達する。

「チッ！」

俺はこの一撃が毎度なのだが、避けられず腕をクロスしてガードするが、だいぶ後ろに飛ばされた。

「…………ツ！重いな！」

そっこう毎度の仮想トレーニングをしていたが、結局倒せずいつの間にか7時になっていた。

「…………はあ。今日も勝てねえか……」

流石は俺の親兼『日本の最終兵器』。  
最早人間を遙かに越えたその力は、中々倒すに至れない。  
手応えは掴めそうなんだが……。

「とりあえず、飯食うか」

家に戻るが、何故だか両親はいなかった。

「なんでいねえんだ？……置き手紙？」

置き手紙には『パパと海外旅行に行ってきた』と書いてあった。

……あのバカップル家族め。

仕方ねえ……。

飯い自分で作るか……。

で、何故だか俺はそのまま意識が飛んだ……。

次に目を冷ますと、ソコはただただ白いとしか言いようが無い場所だった。

「……………此処は……………」

周りを見てるとふと気配を感じ、そちらに振り替える。  
勿論臨戦態勢はとってある。

「おー。流石は武神だな」

「は？」

ソコには、女性が笑いながら突っ立ってた。  
立ち振舞いに隙がなく、それでいて激しい違和感を発するその女に戸惑う。

「……………貴様……………何者だ」

「神だけど、まあそんな事はどーでも良いんだ。お前と戦いたくて私はウズウズしてるんだ」

なに？神だと？

……何を世迷い事を。  
……まあいい。売られた喧嘩は高値で買う主義だ。  
いっちょ暴れてやるか。

「分かった。戦り合おうじゃねエか」

自称神の見た目は、黒髪のストレートで発育はこれでもかと言つくらいに良く、身長は多分160?程度だろう。

「なら、行くぞ！」

自称神は縮地の要領で一気に間合いを詰めてこようとした。

……が、俺がソレを見逃すワケは無い。

近づいた時点で即座に「壊盾<sup>かいじゆん</sup>」で殴る。

壊盾は対砦を想定していると言つことらしく、防御をされるとその真価を発揮する。

……やはり防御したか。

「なっ……！グッ……」

壊盾の真価は盾や砦のような守るモノを破壊する事にある。

ガードされずとも、威力は高い。

が、戦力を削ぐと言う点でこの技は特化しているのだ。

言うならば、ガード破壊効果と言ったところだろう。

現に今自称神はガードを崩され、完璧に無防備となっている。  
……追撃するか。

「不倒流…ふたやり双鎗」

この技は自らの両腕を槍のように鋭く、それでいて射し込むように  
撃ち抜く技だ。

連撃の数としては一秒間に18回。

一般的な武道家なら、コレでお陀仏だ。

「グツ……！……流石重い。なら次は私から行くぞ！」

また懲りずに距離を詰めてくる。

今回は、溜め時間が足らずにインファイトとなった。

「ウラアアアア！！！」

女性が発する掛け声じゃ無い気がするが、そんな事はどうでもいい。  
問題なのはその威力だ。

女性とは思えぬ一撃一撃の重さ。

親父までとはいかないが、相当重い。

「チツ…！不倒流…守壁」

守壁は気を体に回し、防御を遥かに高める技だ。  
多分親父の貫槍でも五発くらい来ないと崩せないだろう。  
……………反撃だ。

「不倒流……………反式刺貫く拳」

これは守壁からの反撃技として特に威力の高い技の一つだ。  
その威力は、突撃してくる四トントラックを後ろにぶっ飛ばすくらい  
の威力がある。  
……………実際やった事あるし。

「ッー」

……………気を使ったか。  
……………が、食らった時点でダメージは相当な筈。  
止めと行こうか。

「止めだ」

両拳を体の前でぶつけ合い、気を両腕に溜める。

「不倒流…流星」

言葉と同時に、白い閃光が俺の拳から迸り、ソレをガードしたが食らった自称神は数バウンドした後崩れ落ちた。

「久しぶりに親父以外のヤツとマジでやったな。武器は使わなかったがよ」

「…ま、負けたのか…？私が…」

割と精神的ダメージの方が大きいようだ。

………傷がもう塞がってるんだがマジかよ…。

「強かったぜ。自称神さんよ」

「…お前こそな。次は絶対勝たせてもらうぞ？」

「はっ！やれるならな！」

と言ってる間に自称神は無傷の状態に戻っていた。

……ワケわかんねえ。

「で、自称神よ」

「自称じゃない。マジの神だ。私は一応女神様なんだぞ?」

「はあっ!? 女神いつ!? 嘘つけ嘘を」

コイツが女神ならオバサンですら女神んなるぞ。

この戦闘狂が女神なワケ無いだろ。

………確かに可愛いんだがさ……。

「可愛いなんて褒めるんじゃない」

そう言ってくねくねする自称女神。

………思考を読んだのか?

「正解。良く分かったな?」

「………はあ。マジかよ……」

これでコイツはエスパーかマジの女神かどっちなかしかねえじゃねえか…………。

「コイツは失礼だぞ！女神様だ女神様！敬えよ」

「で、その女神様よ。テーマと会ってる俺は死んでるっつー事かよ？」

「ああ、死んだな！食中毒で！」

……………………え？

「しょ、食中毒？」

「そう。食中毒だ。因みに、現世のお前今こんな感じ」

映ったのは、ご飯を片手に箸を口にやって倒れてる俺。

……………マジで？

「な？マジだろ？」

「は、恥ずかしいいいい！！なんだよ食中毒！マジハズイよ！ご飯食って死ぬとかマジ笑えねえって！」

「アハハハハ！」

そんな俺を見て笑う女神。

「オイコラ。テメーなんでこんな死に方させやがった」

「お前と戦いたかったけど、身近な死に方がソレしか無かったからだ」

「せめて心臓発作にしろやボケエエエエ！！」

「あ」

今思い出したみたいなお顔をするバカ。

「バカじゃない！」

「俺に羞恥性が高い死に方をさせたテメーがワリイ」

ホント今すぐ天蓋でその腐った脳ミソ叩き潰してえ気分だ。

「ホント勘弁してください」

平に謝る女神。

「て、この代償の代価はなんだ？」

「私の体で……ぎゃっ!!」

とりあえずイラツと来たから拳固しといた。

女神は頭を両手で擦りながら、涙目で俺を見る。

「ううー。いたいぞー。こんな美女が誘ってるのにー」

「テメーに殺られた俺の残りの人生はどうなるかって聞いてンだよボケが」

眉間に青筋を浮かべながら女神に聞く。

「ソレなら転生だ！。ランダムだがな」

「そうか」

まあ、新たな世界で頂点に立つのもまた面白いかね。

「それよりお姉さんとしては、断られて私に魅力無いのかと思っちやっただけど？」

「大丈夫だ。魅力はバツチリある。ただ……俺を誘ったら足腰立たなくなるぜ？」

脅し……ってか、悪ふざけでそんな事を言ってみた。すると、女神の顔がみるみる真っ赤に……。

「……………へう／＼」

ヤバイ。コイツは九割方妄想癖を有してやがる。  
……………女神の癖に……。

「とりあえず、特典とかねえのか？」

「だから私の体で……ぴぎゃっ！」

とりあえずやはり拳固しといた。  
粛清だ。だいぶ危ないしな。

「転生する時の特典だボケ」

「うー……。限界除去とそれぞれの世界に見合ったスペシャルアイテムだ」

限界除去は素晴らしいな。  
コレで、親父を越えられる。

「むう……。なんでそんなに断るんだ」

「尻の軽い女は嫌いだ」

「軽くない！」

うっかり本音が出てしまったが、見事に突っ込まれた。

「現に誘ってんだろぅがボケ」

「誰彼構わずじゃない」

……はい？

「私がお前に惚れたからだ」

「……やっぱりバカだわテメー」

何今会ったヤツに惚れてんの？  
ワケわかんねーよ。

「バカでも良い！」

「……はあ……。とりあえずさっさと転生させろ」

「……むう……。次回に期待だな。じゃあまたなー」

次回って俺次死んだ時はフツーに天国かどっかいくだろ。

「大丈夫！女神様特権使うから」

……やっぱバカだったか。

「……はあ……。じゃあまたな」

呆れ気味に言ったんだが、女神のヤツは何故だか笑ってやがった。つてか、第一いつ俺女神のフラグ立てたよ？

「じゃあな」

地面がバカッと開く。

「……はあ。また古風な手え使いやがって」

俺はその暗く深い穴を落ちていった。  
途中意識が飛んでしまったが。

A c t · i · 俺はサーヴァントとなったようだ・（前書き）

むう……。

アサシンに出来そうな英雄って誰かいましたっけ？  
いたら教えてくれると有りがたいです！

A c t ・ 1 ・ 俺はサーヴァントとなったようだ・

次に目を開けたソコには、赤い服に黒髪ツインテールの……………あれ？

見た事かなりある気がする。

……………誰だっけなあ。

名前さえ思い出せたら、この世界の事も何か分かるかも知れない。

「アンタが私のサーヴァント？」

……………あつれえ〜？

コレってF a t eの世界か？

だって遠坂凜じゃんこの子。

……………サーヴァント？

転生でサーヴァント？

マジで？生身のサーヴァントとか無いだろ。

「どつなのよ？」

遠坂？が俺に確認を取ってきた。

「多分そうかな」

「多分？まあいいわ。クラスは？」

……………クラス？

知りませんが何か？

聞いてませんが何か？

『あ、その世界に墜ちたんだなー』

丁度良いくらいで念話が入った。

……………何のクラスだろ？

バーサーカーらへん？

いや、アサシンも出来なくは無い。

ソレ言ったらセイバーもアーチャーもランサーも出来るんだが。

『えーっとクラス名はベヘアシャー』

ベヘアシャー……………確かドイツ語で君臨者だっけ？

……………ああ、世界チャンピオンとして君臨してたからか。

『スペシャルアイテムは……………紙に書いて内容をポケットに入れたいからな』

(オツケー。まあありがとな)

『ああ。じゃあまた今度な』

で、念話は切れた。

スペシャルアイテムってこの世界では宝具になるのか？

「取り敢えずクラス名はベヘアシャー」

因みに、念話は約十秒しか経ってないと言うハイスペックさだ。  
あの会話を十秒ってのは割と早いと思う。

「ベヘアシャー？イレギュラークラスって事？」

「そうゆう事。そのお陰で、能力制限は一切無しだ」

感じだが、体が重くとかは無いからな。

「……………セイバーじゃないのね……………」

セイバーがクラスの中では一番つええクラスらしいからな。

「俺に資格があるクラスはセイバー、ランサー、アーチャー、バースーカー、アサシンだが？」

……………多分な。

実際のクласの資格あるか知らねえし。

「そう。真名は？」

……………言っても絶対知らないと思うんだが？

「不倒咲夜だ」

「……………誰よ」

目に見えるくらいの失望感を漂わす遠坂？。

「…ああ！もうハズレ掴ませられたわ！」

「ソレ本人前にして言うかなあ……………」

俺でも流石に傷付くぞ？

「……………じゃあ何の英霊なのよ？」

……………英霊じゃないんだが。

「異世界のかな？」

「は？」

「だから異世界の英雄」

英雄かは分からないけど、仮にも武神とか呼ばれてたんだ。英雄としていれると思う。

「……………なんのよ？」

少し落ち着いてくれたみたいだ。落胆半端無いけど。

「異世界では『武神』とか呼ばれてたな」

「…もしかして、神格クラスなの？」

あ、期待が入った。

「いんや、呼び名だな呼び名」

「…期待させるんじゃないわよ…」

やはり目に見える落胆をする遠坂？。

「じゃあ、パラメーター見てみれば？」

見た感じココアレだ。

あのステンドグラスあるトコだ。

敵の人形二体もいるし。

待ってるとか律儀な奴らだな。

……ココって霊子虚構世界……セラフか。  
ゲームだし出来るだろ。

「ええ。そうするわよ」

あ、やっぱパラメーター見えるんだ。

……あ、固まった。

ってか、まだ予選通ってないのに何であのケータイあんだ？  
七不思議の一つだな。

「はあ！？なによこのパラメーター！アンタホント人間！？半神とかじゃないの！？」

「人間だぜ！」

ぐっとサムズアップしといた。

「……………はあ……。もう良いわよ。でも、このパラメーターなら勝ち抜けるかも！」

ああ、確かFate/extraは七回戦うんだっけか？

「マスターの名前はなんよ？」

「私？私は遠坂凜よべへアシャー」

「オツケー。凜ね。ってか、どうせこの世界で俺を知ってるヤツいねえし、咲夜で良いぜ」

「まあそれもそうね」

言ってて悲しくなったのは何故だろうか？  
まあ良いや。

「咲夜、アンタスキル無いの？」

「…あると思うんだけど乗ってなかったのか？」

あのケータイでは乗ってなかったらしい。

「ええ。一つもね」

ああ、ソレっぽい発言しないとスキル分らないのかな？

「じゃあ、知らないままで良いんじゃない？」

説明の仕方解んないし。

「自分のサーヴァントの手の内くらい知ってなきゃダメでしょ」

staynighntの凜を否定した!?

「第一宝具の欄ハテナってなによ!」

あ、そうだ。紙にのってるんだっけ。

取り敢えず、ポケットを探ると紙が入ってた。

『宝具は『害なす魔の杖』レイヴァーティン。形は剣で、オマケとして古代遺物のアーティファクトの神の気紛れ』って言うのを渡すぞ。』

二つも渡されんのか？

『『神の気紛れ』アーティファクトは、救いたいと願ったモノを危機から救える効力を持つ古代遺物だ』

あ、割とチート。

ってか、この効果なら敗者が死ぬアレも回避出来るな。

(へえ。スペシャルアイテムってだいぶチートだな)

とか考えてたら、凜が声を上げた。

「何で古代遺物アーティファクトなんて持つてるのよ!? ソレに、宝具二つともEX  
つてなによ!?!」

ソレを聞き、凜のあのケータイみたいなのを覗き込む。

害なす魔の杖レウァアテイン EX

古代遺物『神の気紛れ』 EX

……………だいぶチートだな。

「……………バグね」

「バグじゃないチートだ!」

胸を張って言う。

「……まあ良いわ」

諦め良くなったな。

「咲夜、姿消しなさい」

「……無理」

「はあっ！？霊子化ぐらい出来るでしょ！」

「無理。だって俺生身だし」

生身で姿消すのは無理だよね。

「はあっ！？んなワケ無いでしょ！」

「マジだって。霊子化は出来ねーけど、気合いで体消せるかも」

「はっ。」

「そりゃー圏・境！」

この世界での初なんちゃってシリーズの第一弾はなんちゃって圏境となった。

他にもなんちゃって舞空術とか色々出来る。

「は？……ホントにチートね……」

誉めるなやい！チートは生前からの俺の誉め言葉だぜ？

「取り敢えず敵は良いのか？」

何と無く敵さん達が可哀想だから言ってみた。

「いたのね。待ってるとか律儀な奴らね」

忘れられてるとか、本気で可哀想な奴らだな。

「人形共。掛かってこいやオラ」

人形が動き出し、俺に向かってくる。  
……が

「よつが初終流庸牙」

これは『貫槍』の弱いバージョンだ。  
威力は数段、いや数十段落ちるが、それでもオートントラックくらい  
ならブツ飛ばせる。

「あ、終わったし」

一撃で二体の人形は粗大ゴミとなった。

「………咲夜。アンタホントチートね」

チートは俺に対する褒め言葉なんだぜ！

………で、その後言峰と思わしき声が聞こえたがスルー。  
どうやら一番最初だったらしい。  
一番乗りだな！

（って、これでゲームの主人公達も来るのか？）

主人公はなに出すんだろ？

セイバー？アーチャー？キャスター？それとも……別の何か？

そんな考えに馳せていた。

……で、そんな考えに馳せていたら、急に目の前が光った。

「眩し……」

で、光が止んだら俺の手元に指輪と、目の前に浮かんだ紅い刀身の  
剣が出てきた。

……あと手紙みたいの。

「……手紙？」

取り敢えず剣は腰につけといた。

『私からのプレゼントだー。有り難く受けとれよー』

手紙にはそんな事が書いてあった。

「……………はあ……………」

「……………その剣がもしかしてレーヴァテイン？」

因みに、圏境はすぐ解いた。

……………知られても全く困らねえからな。

「ああ。これは隠しといた方がよいかな？」

「勿論よ！」

……………隠さなかったら本気で殴られそうだな。

……………肉体は痛くないけど、心は痛い。

「圏・境！」

やっぱりなんちゃって圏境で剣を隠した。

……………あ、かなり便利だコレ。

そう思いながら俺は凜に付いて、先に進んでいった。

Act・2 主人公はキャス狐を呼んだようだ(前書き)

ちょっと失敗したんで削除して再投稿しました。

やっちゃったとはこの事ですね。

アサシン、ライダーの英霊を募集してます！

あと、感想書いてくれると有り難いです！

Act・2 主人公はキャス狐を呼んだようだ

「取り敢えずマイルームに行くわよ」

……この凜の提案により、俺はめでたくもマイルームに連行される事になった。

……めでたくないが。

「凜。普通に歩けるから引つ張らないでくれよ」

「アンタは放つて置くと逃げるでしょうが!」

こんな事を言われたのにも理由がある。  
さつき興味本意で教会に遊びに行こうとしたら、首根っこ掴まれて止められたからだ。

……型月の蒼崎青子と蒼崎橙子に会いたかっただけなのに俺の自由は許されないのか!

『ミス・ブルー』と『傷んだ赤色』<sup>スカー・レッド</sup>を見たかったんだ!

……『傷んだ赤色』<sup>スカー・レッド</sup>っていうとぶち殺されるんだっけか……。  
口滑らさないようにしようっと。

「今は勝手にどっか行かねーってばー」

「さっき逃げたのに信用されると思ってるの？」

「凜の束縛癖が酷い！」

プチッ…

「ふざけてんじゃないわよ！…！」

「ぬおっ！？」

綺麗に背負い投げが決まった。

冗談なのに……。

勿論背負い投げされた時に受け身を速攻で取って立ち上がった。いた。

「凜。冗談は真に受けたら疲れるだけだぞ？」

「……はあ。もう咲夜のせいで疲れてるわよ」

そう言って溜め息を吐く凜。

「取り敢えずマイルームに行くんだろ？行くぞ？」

「……誰のせいで立ち止まったと思ってんのよ」

「悪い悪い。取り敢えず行こう？」

「……はあ……。そうね」

疲れた凜を連れ、俺達はマイルームに辿り着いた。

……マイルームの中紅一色だな。

……あ、鏡あるし。

「今の格好は……」

鏡に映った俺は、一言で言えば赤一色。

赤色の朱雀の羽織に紅い袴。

内着には、黒い着物を着ていた。

「凜。今の格好似合ってる？」

自分ではあんま分からないから聞いてみた。

「まあ似合ってるんじゃない？」

て、適当だー！？

「って、凜も俺もマイルームも赤色ってどうよ？」

「良いんじゃない？」

……まあ、別に良いけどさ。

「ソレより咲夜。何でかアンタから金の匂いがするんだけど？」

「まあ、生前金には特に縁があったからな」

『情報マトリクス入手！』

テロレロリン

的擬音が付きそつな表示が出た。

「あ、新しい情報ね。……その黄金律私に寄越しなさい！」

「ヤダ！」

……黄金律 EX

某金ぴか王より上って何事？

「良いじゃん。どっか回ってたらかなり金はいっぜ？」

因みに今出た固有スキルは

黄金律 EX

単独行動 EX  
だ。

EX多くない？

「私に回ってくるみたいだし、まあ分かったわ」

で、こんな感じで話してたんだが、凜が何を思ったのか急に立ち上がった。

「校舎を調べに回るわよ」

その言葉により俺は連れ回された。  
……………で、今は屋上だ。

「一通り調べてはみたけど、おおまかな作りはどこも、予選の学校とたいして変わらないのね」

「変わったたのは2・Bのクラスがマイルームになってたくらいじゃないか？」

「そうね」

とか凜と話していると、後ろに気配を感じた。

……………主人公じゃん。

因みに、性別女性の方だった。

「……………あれ？ちょっとそこのあなた」

「……………私？」

最初のイベント発生？とか思っていたりした。

「そう、あなたよ。……そういえば、キャラの方は、まだチェックしてなかったわよね……。うん、ちょうどいいわ。ちょっとそこ動かないでね」

凜の手が主人公の頬に触れる。

……………これはNPCじゃないって言った方が良いのか？

「へえ、温かいんだ。生意気にも。……あれ？おかしいわね、顔が赤くなってるような気がするけど……………」

そう言いながらも、主人公にベタベタ触る凜。

……………笑いが堪えにくいんだが……

「なるほどね。思ったより作りがいいんだ。見かけだけじゃなく感触もリアルなんて。人間以上、褒めるべきなのかしら」

……………笑いが……耐えられません。

「ハハハハハ！」

「……………何笑ってんのよ咲夜。NPCだってデータを調べておいた方が今後の役に立つでしょ」

「ハハハハハハハハ！ハ、ハア……。り、凜……。ソイツもマスターなんだけど？」

笑いすぎて腹が痛くなった。

「…え？彼女もマスターなの？ウソ…だ、だってマスターならもつと……」

「いや、マスターだって」

「ちょ、ちょっと待ってよ。それじゃあ、いま調査で体をベタベタ触ってたわたしって一体……」

顔が赤くなる凜と主人公。

「くっ、なんて恥ずかしい……」

「わー、凜が痴女だったー！」

悲しそうに言ってみた。

「う、うるさい！私だって失敗ぐらいするってーの！痴女とか勘違いしないでよっ！」

「だって現に……」

「失敗しただけって言うてるでしょ！」

凜が顔が赤いままキレる。

「職業病みたいなものなのよ！コレだけキャラのモデルが精密な仮想世界も無いんだから、調べなくてなにがハッカーだったの」

「わー。そうなんだー」

棒読みで返事を返す。

「だ、大体、そっちも紛らわしいんじゃない？マスターのくせにこれらのモブキャラと同程度の影の薄さってどうなのよ。今だってぼんやりした顔して。まさかまだ予選の学生気分で、記憶がちゃんと戻ってないんじゃないでしょうね？」

鋭いなー。

全くその通りなんだよ。

ってか、過去の人物（肉体無し）だもんな。

まあ仕方無いと思うぞ？

「凜が女の子虐めてる……」

「ち、違つわよー！って、ホントに記憶が戻ってないの？それって…かなりまずいわよ」

「まあ、戦闘経験とか覚悟とか色々足りないのアレなモンが無いからな」

弄るのもアレだし、凜に乗っかる事にした。

「そう。聖杯戦争の勝者は一人きり。あなたは結局、どこかで脱落するんだから」

「最後まで残る可能性もあるだろ？」

「無いわね。私達と当たるまで生き残つてると思えないもの」

酷い言い種だな……………。

で、凜は外に向き変える。

それと同時に後ろからキヤス狐が出てきた。

…………… ああ、キヤスター呼び出したのか。

「ご主人様を前にして、何とも身のほど知らずな女ですねー。んー、軽くシメちゃいます?」

キヤス狐挑発的だな。

「……………ま、御愁傷様とだけ言っておくわ。今回のオペは、破壊専門のクラッキングじゃなく、侵入、共有のためのハッキングだったし。一時的にセラフが防壁を落としたといっても、あっちの事情は私たちには知れないしね。あなた本戦に来る時に、魂のはしっこでもぶつけたんじゃない? ロストしたのか、リード不能になってるだけか、後で調べてみたら?……………ま、どっちにしても、あなたは戦う姿勢が取れてないようだけど。覇気と言うか緊張感と言うか……………全体的に現実感が無いのよ。記憶のあるなし、関係なくね。まだ夢でも見てる気分なら改めなさい。そんな足腰定まらない状態で勝てるほど甘い戦いじゃないわよ」

凜。取り敢えず貶すか心配するかどっちかにしてくれ。

貶してる割合の方が高いけど。

「取り敢えず、初めまして。俺は不倒咲夜。君の名前は?」

「え？あ、えっと月詠奏つくよみです。初めまして」

取り敢えず挨拶してみた。

後ろの凜にはめっさ睨まれてた。

「そう、奏ちゃんね。俺は咲夜で良いぜ」

「あ、あの…あなたもマスターなんですか？」

「ノンノン。俺はサーヴァントさ！」

「へ？」

驚く奏ちゃんと、刺し貫くような視線を放つ凜。

視線がめっさ痛いです。

サーヴァントが真名を明かすな！

って事か？

「取り敢えず奏ちゃん。困ったら俺らに相談すると良いぜ。凜はともかく、俺は忙しくなきゃいつでも相談に乗ってやるからよ」

「え？あ、はい！それじゃまた」

で、主人公…奏ちゃんは去っていった。

「ハハハハハハ……」

「……咲夜？」

ガツシリと俺の肩を掴む凜。

「ん？どうした凜？」

「『ん？どうした凜？』じゃないわよ！なに軽く真名明かしてんのよ！」

「だって、俺の真名知ったって誰か分かるワケ無いし」

「……確かにそうだけど、それでもよよ！」

ってワケで凜に滅茶苦茶怒られた。

「……………取り敢えず一回戦の相手見に行こうぜ」

「……………はあ……。まあそうね」

「あと言っとくけど、そんなに怒るとシワ出来るぜ?」

「余計なお世話よ!」

凜に思い切り蹴られた。  
痛くは無いけどなんだかな……………。

……………で、一回戦の相手を見る。

マスター：桐谷礼司

決戦場：一の月想海

……………誰?

「雑魚ね。すぐ蹴散らせるわ」

「名前知らないしなー」

マジ一回も聞いた事無い名前だつて。

ピピピピ……。

電子音が鳴り響き、それを凜が見る。

「取り敢えず、第一暗号鍵が生成されたしアリーナに行くわよ」

「オツケー」

そうして、俺らはアリーナに向かっていった。

A c t ・ 3 初アリーナと黄金律（前書き）

訂正あつたんで直しました。

……なんでこんなミスしたんだろ？

取り敢えずさつさとF a t e / e x t r a全クリしないとなー……。

Act・3 初アリーナと黄金律

一階の廊下を歩き、アリーナに向かう最中ワカメを見た。

(ワカメの奴、初戦負けすんだろっとな、マジご臨終だ)

とか思いながら、アリーナの扉に向かう。

「なあワカメと奏ちゃん。もし戦ったらどっち勝つと思うっ?」

「ワカメじゃない?」

もはやワカメ扱いの………ええつと……間桐慎二。  
あぶねー。ワカメってしか思えなかったよ。

「俺は奏ちゃんかな。あのキャスター中々強いぜ」

「ワカメもそれなりのサーヴァント引いてるんじゃない?」

「確かに『フランス・ドレイク』あの『エルドラゴ悪魔』がサーヴァントだ

しな」

「何でそんな事知ってんのよ？」

……………失言した…。

「いや、見た事があつただけだよ。星の開拓者のスキルを持つ者くらい容易に想定できるさ」

「そつ。なら良いわ」

……………誤魔化しきれた…。

「取り敢えずアリーナに入るか」

「ええ」

取り敢えずアリーナに入ると、突然威圧感に襲われた。

「チツ……………。対戦者が狙ってるみたいだ」

刺し貫くような異様な視線。  
姿を見せず殺しにかかるか……。  
だとすれば、アーチャーかキャスター、アサシンのどれかだな。

「ええ。分かってるわ」

…はあ、全く一の月想海を見学しようと思ってたんだが……。

「まあいい。不倒流『絶対領域』」

『絶対領域』は範囲内の攻撃の一切を反射的に拳で反撃、相殺したりする技だ。

「何よソレ？」

「まあ、いずれ分かるさ。取り敢えず炙り出す為にゆっくり観光するとしよう」

「……まあ、咲夜にも考えがあるんだろうし良いわよ」

さて、廻るとしますかね。

……炙り出てくるが良い。  
その真名、見極めてやるぞ。

「取り敢えず廻るぜ」

歩くとすぐ噴水が見えた。  
どうやら回復ゾーンらしい。

「お、アレがエネミーか？」

「そうね」

エネミー……KLEINは俺に近付いた瞬間、『絶対領域』の力により、ワンパンチで倒れ散った。

「手応えねーな。あ、何か落としてった」

落としたのは……10000PPT……俺の黄金律スゲーな。  
こんな大金落ちるなんて。

「咲夜……スゴいわね」

目をキラキラとする凜。

俺の黄金律スキルに敬服モノらしい。

で、探し回ってたら宝箱みたいなのを発見した。  
入ってたのは……またもやPPTだった。  
ソレもかなりの額。

「咲夜がいるとPPTに困らないわね！」

「俺は金が出る機械じゃないぞ？」

「知ってるわよそれくらい」

多分狙ってるヤツにだいぶ情報与えてるな。

まあ、今の情報から見るにアサシンと思われるけどそうだが。

……このまま間違った情報与えるか？

「っと、敵さんはだいぶせつかちみたいだな」

向かってくる気配。

……飛び道具か？

「チツ……………」

絶対領域で撃ち落としたがかなりの威力だった。

「矢……………か？……………相手はアーチャーのようだな」

「そうみたいね。咲夜。その矢、回収しといて」

……………雑用じゃないんだがな……………。

「はあ……………。凜、お前サーヴァントをなんだと思ってる？」

「使い魔みたいなものでしょ？」

……………はあ。

俺は使い魔じゃないんだけどな……………。

「まあいい。敵さんのお出ませだけ」

「良く分かったな。流石アサシン。読みが良いじゃないか？」

凜はニヤって笑ってた。

……だよなあ。勘違いしてるし。

「フハハハハハ！流石はアーチャー。さっきの矢は中々の威力だったぜ！」

横のアーチャーみたいなヤツに言う。

相手の見た目は白髪の初老の男だ。

服装は軽装で、弓を後ろに背負っている。

「そうか。お前も強いようだが、私は負けるわけにはいかない。聖杯戦争は我が最愛の妻に会うが為の最後の手段なのだ」

「そうか。でも俺も負けるワケにはいなくてね。一つ手合わせ願おうか」

なんちゃって圏境を解き、レーヴァテインを手にする。

「ならば、行かせてもらおう！」

戦闘に入った瞬間、警告が鳴り響いた。

【セラフより警告 アリーナ内でのマスター同士の戦いは禁止されています】

「構うか！」

「撃ち抜かれるが良い……」

アーチャーから、圧倒的威力の矢が放たれる。

「チツ……不倒流『白陽』はくよう」

白陽は剣撃の嵐により、白い壁を作る防御技だ。  
……今は赤いけどね？  
当たった瞬間、矢は塵の如く消え去った。

「面妖だな」

「そうか。初終流『八撃』」

剣を即座に鞘に納め、八撃という連撃技を放つ。

一ヶ所に八回拳を当てる事で、威力を格上げさせる技だ。

「かつ……………」

二発は避けられた。

……………本当にやるな。

「主よ。宝具の許可を……………」

どうやら、アーチャーは本当にせっかちらしい。

【セラフより警告 あと三十秒で戦闘を強制終了します】

「そんなこと出来るワケがないだろ！」

「クソツ……………！ならば！」

接近戦に持ち込もうとするアーチャー。

良いだろう。

その提案、乗ってやる。

「ウオオオオ!!」

「来い!!」

ラッシュに入る。最初は、俺が一撃、アーチャーが一撃のペースだったが、徐々に俺が加える打撃の方が多くなる。俺ってスロースターターなんだよね。

「ク、クソツ……じよ娣……が娥ア……」

そう俺にギリギリ聞こえる程度の声を出す。

【セラフより警告 戦闘を強制終了します】

「チツ……」

あと少し、少しだけあれば必ず倒せる筈だったが、セラフの介入が入った。

「……………助かったのか？クツ……アーチャー！退くぞ！」

「チツ………………。分かった。主よ」

そう言っつて、対戦相手の桐谷礼司とアーチャーは去っていった。

「…………あのアーチャー。随分焦っていたわね」

「ああ、何がヤツを駆り立てるか。本当に興味があるな」

ヤツは僅かに嫦娥と口にした。

嫦娥というモノに係るサーヴァントなのか？

「取り敢えず、第一暗号鍵を入手しに行くわよ」

その凜の言葉に俺は着いていった。

くそしてマイルームく

アリーナで第一暗号鍵を無事に入手できた。  
取り敢えずは情報整理だ。

「凜、情報はどの程度だ？」

「相手がアーチャーで、妙に焦っているくらいね」

クラス     アーチャー

マスター   桐谷礼司

スキル

焦燥   C -

過去に起きた裏切り、悲劇的出来事により、時々冷静さが保てなくなる。

コレが今の情報だ。

「ヤツは僅かに娼娥と口にした。ソレを明日、図書館に向かい調べるとしよう」

「そうなの？」

「ああ」

「分かったわ。じゃあ明日向かいますよう」

そうして、一日を終えた。

……………あのアーチャーが冷静ならば、だいぶ厄介そうだな。

A c t ・ 3 初アリーナと黄金律（後書き）

うーん、この情報で真名が分かった人いるかも知れませんが。

ちなみにスキルは一回戦だから、マジで強いのが来たら死ぬので弱体化させました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0323p/>

---

Fate/The Martial artist - 異質なる転生者 -

2011年5月14日22時48分発行